

東京バッハ合唱団 月報

[第 575 号] 2010 年 5 月

〒156-0055 東京都世田谷区船橋 5-17-21-101 郵便振替：00190-3-47604
Tel：03-3290-5731 Fax：03-3290-5732
mail: bachchortokyo@aol.com http://www2.tky3web.ne.jp/~bach/chor/

BACH-CHOR, TOKYO

Monthly Newsletter No.575
May 2010

5-17-21-101 Funabashi,
Setagaya-ku, Tokyo

演奏会の聴衆、他者-隣人-同時代人

大村 恵美子

5月16日、6月6日と、私たちはまた演奏会で、聴衆の方々に歌いかける機会にのぞんでいます。そのつど私は、生きた多くの同時代人に、自分の生きた言葉を直接伝えられる音楽というものを、とても貴重に思い、深い感謝の念を新たにします。

文学でも、美術でも、独自の自己表現をもって他者と交流する手段はいろいろありますが、それらは、作者の死後になっても、幸運な場合には、ひとから見られ、読まれて、大きな感動さえ与えることもあります。それにひきかえ、音楽は、実際の音を空気をとおして伝えるのはただ1回かぎり、永久に終わります。レコード盤その他に録音されて、後世に恒久的に残す道も開かれてきましたが、美術等にくらべるとワンクッションおいた伝わり方になります。そのような音楽のあり方は、文学、美術等とどちらが優れているともいえず、それぞれに貴いものと言うしかありません。

*

月報2月号の「仮想敵国 とは？」という随想で、私は、日本人の歴史的態度に関する反省を話題にしましたが、ちょうどそのころ、内田樹（たつる）という評論家の著書が「新書大賞」に選ばれて、ベストセラーになっていました（新潮新書『日本辺境論』2009年11月刊）。そのなかでも触れられていますが、「世界的に見ても、自国文化論の類がこれほど大量に書かれ、読まれている国は例外的でしょう。」（同書p.22）

要領よく読者を論点にひきつけてくれる好著で、始めからこう切り出されています：

本書における私の主張は要約すると次のようなこととなります。「日本人にも自尊心はあるけれど、その反面、ある種の文化的劣等感がつきまとっている。（…）ほんとうの文化は、どこかほかのところで作られるものであって、自分のところのは、なんとなくおとっているという意識である（…）」引用したのは梅棹忠夫『文明の生態史観』からです。（…）私は、こうなったらとことん辺境で行こうではないかというご提案をしたいのです。（同書p.10）

*

この本の内容を紹介する場ではないので、どうぞ各自でお読みいただきたいと思います。私自身の立ち位置に

ついて、わざわざお断りすることはないと思いますが、両親ともアメリカ生まれの二世、満州での幼少期、ヨーロッパへの留学と何度かの滞在などで、どちらかといえば、昔風の形容では ヴァガボンド コスモポリタン いくぶんアナーキー のような傾向といえましょうか。毎年のように海外に出かける人々もふえている昨今では、むしろ慎ましいほうでしょう。

この合唱団（1962年創立）の初期にこんなことがありました。知人のひとりが、まったく悪気ない調子で、「こんどドイツからホンモノのバッハ合唱団がくるそうですね」（ミュンヘンバッハ合唱団のこと。1969年初来日）。また、定期演奏会は日本語訳で演奏するという方針は、留学前からきめていたのですが、最初のモテットの全曲上演のとき（1971年）言葉に密着するモテットだけは、例外的に原語上演にすることにしました。すると、親しい音楽家から、「いよいよ原語演奏になるんですね」と、祝福するように言われました。その後は、団員やまわりの多くの方々の強い要望もあって、モテットも全曲日本語訳を完成させたのですが、こんな2例だけでも、周囲の反応が、私たちの日本語演奏を、一段劣るインチキなものとして見ていたことがわかります。

*

話をまた、日本文化論にもどします。私は、一般人として何回か海外に行っただけですが、そういう折、未熟でも言葉を身につけようと、地元の人たちとなるべく話すよう努めてきました。現地での生活者とのコンタクトが、会話上達のいちばんの近道なのです。長時間の公共交通の中では、近くの乗客と親しくなり、現在にいたるまで

演奏会予定

5月16日（日）15:00 開演 ……………【詳細 p.2】
特別演奏会（第21回荻窪音楽祭参加）
曲目：BWV17, BWV4（前半にワークショップ）
会場：日本キリスト教団 荻窪教会
入場整理券：500円（定員先着90名）

6月6日（日）14:00 開演 ……………【詳細 p.3】
第104回定期演奏会
曲目：BWV124, BWV52, BWV17, BWV4
会場：石橋メモリアルホール（5月オープン）
チケット前売券：3000円（当日券：3500円）

文通、自宅への招待・滞在と、長い交友がつづくことになりました。

すれ違いの人たちの反応も、とても参考になりました。留学中はバイク（初期のホンダスーパーカブ）を乗りまわしていましたが、はじめはスパーク・プラグの消耗なども知らず、アルザスの畑のまん中に車体を残して、オートストップ（ヒッチハイク）で、もよりの修理場を探してもらったこともあります。運転手のごついおじさんが、「日本にはカブキとか映画とか、オリジナルなよいものいろいろありますね」と話しかけてくださり、一般のフランス人のポライトさを感じ入りました。スイスのローザンヌのタクシーでは、「用はないけれど、近い大都市をたずねて見ている」という私に、運転手は「日本人は、そのようによく海外旅行をするけれど、私たちはほとんど国外に出ることはない。どうしてそんなに大金を

使えるのですか？」と真顔で不思議がっていました。アメリカでは、現在も、大半のひとびとがパスポートを持たず、海外に出る必要を感じないということです。

こうしてみると、日本辺境論もたしかにいいけれど、私たちには、地球上のすべてに対する強い好奇心がある。それを、島国のコンプレクスからだけでなく、他国人からどう見られるかばかり気にすることなく、せっかく出ても観光と買い物などのいつときの欲望に引きまわされるだけでなく、また日本のうちに何か持って帰ろう、取り込んでこようと心がけるのでなく、世界のどこに生ずる物事でも、そこに居合わせた同じ人間として、前進・充実・完成に貢献することを目的とすればよいのではないのでしょうか。過度の好奇心・向上心は、マイナスに働いけれど、プラスにも大いに働き、日本人の長所にあげてよいと思います。

*

近頃しきりに私が思うのは、他者に対する態度に、キリスト教の隣人愛やフランス革命・啓蒙思想の友愛もよいけれど、もうことごとく愛と表現しなくても、同時代人という意識を強くいただくことによって、世界中の隅々までの空気が和んでくるのではないかと、ということです。スポーツのイベントだけでなく、生活全般で世界5大陸の住民に目を向けるということです。

人類史は、どこから始まり、どれだけ経っているのかわかりませんが、良いこと悪いことをこき混ぜてはくり返し、一直線に進歩などせず、途方もない迷路にもぶつかってきた。しかしその中で、私自身という主体が、実際に現実で肌をつきあわせて触れることのできるのは、たった100年足らずの短い時空で、ともに呼吸する同時代人だけなのです。知識のうえでいくら過去のことを知り、未来のことを予測しても、今ここに、地球上に乗りあわせている何十億人の人間のほかに、私の手の届く人間はないのです。

そう思うと、常ひごろは避けたがる乱暴者たち、公共の場で化粧したりする下品な人たち、当てつけに自殺してやろうかと思いたくもなるような意地悪な相手など、きりもなくイケ好かない連中でさえも、かまえて敵を愛せなどと悲愴がるよりはむしろ、けっこう面白おかく、もの悲しく、うら寂しく、のぞき込みたくなるように、なつかしくなってくるものではないでしょうか。（お人よしすぎる、とあざけられもしましょうが。）

*

地球上のどこがホンモノで、中心で、どこが辺境で、未開と断ずればよいのか、あまりにも主観的過ぎて、そんなことはもうどうでもよく、この今現在、私は、あちこちで一緒に乗り合わせ、出会った誰彼、食事の席で一緒になった誰彼、同じホールで歌い、聴き、音楽を交わしあった誰彼、.....元気だった人、病んでいた人、死に面している人、みんなに何か挨拶をしたい。生きた証しをやりとりしたことに感謝をささげたい こんな気持

特別演奏会（第21回荻窪音楽祭参加）

Workshop & Concert

「バッハのカンタータを日本語で歌う」

日時：2010年5月16日（日）15:00 開演（14:30 開場）

会場：日本キリスト教団 荻窪教会

<プログラム>

[第1部] ワークショップ（約50分）

“4声体コラールを体験してみよう”

やさしく、どなたでも歌えるコラール3曲（BWV17, BWV4, BWV52より）を実際に体験してみます。（鑑賞のみのお客様も、客席で見学しながらコラールに親しみます。参加希望者には前もって楽譜コピーを郵送）

・イントロダクション（カンタータとは？ コラールとは？ 合唱の喜び＝共同体の完成）

・歌詞を読む / 定旋律を覚える / 各声部をうたう / ハモってみる

[第2部] コンサート（約50分）

カンタータ第17番《感謝ささげ ほめ歌う者に》

カンタータ第4番《キリスト 死に繋がれしが》

レチタティーヴォ部分は朗読（荻窪教会員）、アリア部分は合唱団の斉唱によります。

<出演>

合唱：東京バッハ合唱団

オルガン：金澤亜希子

指揮/訳詞：大村恵美子

<入場整理券>（前売中、定員先着90名）

500円（コラール楽譜・資料代含む）

会場（荻窪教会）の席数には限りがございますので、ご鑑賞のみのお客様も、あらかじめ入場整理券をお求めください。当日は満席の場合、ご入場をお断りすることもございますので、ご了承をお願いします。

ワークショップ参加のご希望者には、事前にコラール楽譜コピーをお送りしますので、お名前、ご希望の声部（S/A/T/B/?の内いずれか）、送付先住所、電話番号を、合唱団事務局あてお知らせください。

ちになるのです。

一方的につけこむお喋りや自己主張はうるさいけれど、それこそ「袖振りあう」ほどの人々には、いつも心を通わせたい。演奏会を前にして、私は皆様にこのようなことをお伝えしたいのです。

後援会員・団友の皆様

第 104 回定期演奏会へのご招待について

当合唱団では、後援会員(ご案内下記)・団友の方々に定期演奏会にご招待いたしております。

ご来場を予定されている方は、あらかじめ、ご一報ください。折り返し「招待状」をお送りします。

- 以下、月報 3 月号同封にて既報 -

昨年度は、ドイツ公演の準備と実行のために、定期演奏会に皆様をお招きする機会がございましたが、いよいよ第 104 回定期演奏会をご案内申し上げる段となりました。ぜひともご来聴たまわりますようお願い申し上げます。

さて、月報 3 月号同封にてお知らせいたしましたとおり、当公演に関しましては、ひさびさの開催ということもあって、多数のご来場者が予想されます。また、会場となる「新・石橋メモリアルホール」の座席数は、あいにく、かつての 600 席から 500 席に減っております。

つきましては、ご招待来場者のおおよその数をあらかじめ把握させていただきたく、後援会員・団友の皆様のうち、ご来場予定の方は、お手数ですが、事務局宛てご一報いただけますようお願い申し上げます。

「月報」3 月号同封の返信用ハガキ(切手不要)

または、メール・お電話・FAX・官製ハガキ等で、その旨とお名前をお知らせください。折り返し「招待状」をお送りいたします。

当日は、この「招待状」をご持参のうえご来場ください。当日券も余裕をもって用意いたします。どうぞ、ご友人・お知り合いを多数お誘いいただけますよう、お願い申し上げます。

< 後援会のご案内 >

東京バツハ合唱団「後援会」をご存知ですか？

欧米には、教会や大学、放送局、自治体、企業などが合唱団を維持、育成する伝統がありますが、わが国では残念ながら未だ一般化していません。



第 104 回定期演奏会

J. S. Bach 教会カンタータ日本語演奏

日時 2010 年 6 月 6 日(日) 14:00 開演
会場 石橋メモリアルホール(*)

カンタータ第 124 番 (イエス 共にあらん)
カンタータ第 52 番 (悪しきこの世よ なれを頼まじ)
カンタータ第 17 番 (感謝ささげ ほめ歌う者に)
カンタータ第 4 番 (キリスト 死に繋がれしが)
日本語演奏 (大村恵美子訳詞)

光野孝子(ソプラノ) 佐々木まり子(アルト)
鏡 貴之(テノール) 新見準平(バス)
草間美也子(オルガン)
東京カンタータ室内管弦楽団(オーケストラ)
大村恵美子(指揮)

チケット: 前売り 3000 円(全自由席)
当日券(3500 円)あり
< チケット発売/お問い合わせ: 事務局 >

*) 上掲写真は、この 5 月に改築開館する「石橋メモリアルホール」(上野学園内)。全体は、以前と同様、好残響のシューボックスを基調とし、正面のオルガンもそのまま移築した。ステージに余裕をもたせた反面、座席数の減少が惜しまれますが、音響はいっそう改善されているそうです。お楽しみに。

そうした中で、すでに半世紀に及ぼうとする長きにわたり、当合唱団を支えているのが「東京バツハ合唱団後援会」です。常時 100 名を越える方々が、年間 2 回の定期演奏会と毎月発行の「月報」、創立記念懇親会(7 月)やクリスマス懇親会(年末)などで結ばれ、当合唱団の様々な活動をサポートしています。

バツハを歌いたいけれど練習に出席する余裕のない

方、鑑賞や研究を主になさりたい方、東京バツハ合唱団の存在を愛してくださる方、このような方々に、ひとりでも多く会員になっていただきたいのです。次回の定期演奏会は、後援会員のお一人としてご来聴ください。

後援会の目的：合唱団活動の全面的支援

後援会員の特典

- 1) 定期演奏会(原則として年2回)にご招待します。
- 2) 合唱団「月報」(毎月発行)をお送りします。
- 3) 合唱団発行の楽譜・CD等の特価で購入できます。
- 4) 合唱団主催の催し物をご案内し、ご優待します。

後援会費(年額): 1口12,000円

入会のお申し込み・会費のお支払い

お近くの郵便局の郵便振替をご利用いただくと便利です。

郵便振替用紙(払込取扱票)通信欄に「後援会入会(口数)」とご記入いただき、おところ・お名前・電話番号をお書き添えのうえ、下記にお振込みください。

- ・口座記号: 00190-3、口座番号: _47604
- ・加入者名: 東京バツハ合唱団

折り返し、月報、各ご案内等をお送りし、定期演奏会にご招待いたします。

なお、<団友>は、当合唱団の精神的支えとして、団の活動を支援していただくよう、お願いした方々です。

お便り

「マタイ受難曲」のことなど

島 正孝(後援会員、長野県諏訪郡)

今日は聖金曜日です。[4月2日]

終日、静かに過ごしました。あの人の苦悩を想いながら。

今頃ドイツでは、J. S. バッハの「マタイ受難曲」が演奏され、それがラジオで全ドイツ、ヨーロッパに実況中継されているのでしょうか。今年は誰が指揮をなさったのでしょうか。

私のような年齢(とし)になりますと、落ち着いて、また深い感動をもって聴けるのは、やはりK.リヒター、ミュンヘンバツハ管弦楽団・合唱団で、終生変わらないと思います。

しかし大村先生のマタイも、これから繰りかえしお聴きしたいです。

音楽にまったく素人の私は、可能な限り、何の偏見ももたず素直に、表現される音の内に愛のメッセージ、唯これだけを聴き取りたいです。しかしなかなか出会えないのも事実です。

急にお便りいたしたくなりました。ご活躍を祈り上げます。草々

第5回ヨーロッパ演奏旅行

「記念文集」「記念CD」の反響から 1.

上記の文集とCDは、本年1月に各350部を発行し、旅行参加者・支援者、団員・団友・後援会員等、当合唱団関係者にお配りしました。多くの方々が感想をお寄せくださっていますが、その内の一部を、月報紙に分けて掲載させていただきます。

今回は、団友の皆様からのメッセージ(50音順)。

池田孝子 様

お心のこもったカード、文集・CDと、ありがとうございました。すぐに聴かせて頂きました。カードと文集は遺影の前に供えました。(…)聖書と讃美歌と「マタイ」のスコアと指揮棒を入れて、カンタータ106番で送りました。

(団友、御夫君・池田明良氏[声楽家・指揮者]昨年12月31日に御他界なさいました。御冥福をお祈りいたします)

石井智恵子 様

日頃の御努力の成果が、合唱団の揺籃の地で発揮できたことは、本当にすばらしいと思います。

(団友・後援会員、プランタン銀座創業者)

小田島雄志 様

ますますお元気でご活躍をなさる同級生に拍手します。小生あいかかわらず芝居三昧です。

(団友、英文学者・シェイクスピア翻訳家。主宰者とは、満洲新京白菊小学校1、2年の同級生)

菅野浩和 様

長年にわたる、わが国でのBachへの取り組み、折々にお送りくださいます会報等によって、その御功績を御礼賛申しあげておりましたが、2009年8月の、StuttgartとFreiburgでの演奏旅行の、まさに雰囲気伝わってくるような文集とdisqueに接して、なんと意義深い、確かなことをなされたのだらうという想いを強く感じました。この実現のための、幾多の困難、障害を乗り越えられ、すばらしい結実にいたらしめた強い実行力にも、深く心を打たれました。

たいそう厳しい情勢の昨今、どうかBachと連なる精神の灯を、この遥か遠い日本で掲げ、歩き続けるその営みを、歩み続けのける日々の限りは、どうかお続けになられるように、御期待申します。

(団友、作曲家・音楽評論家)

宮田光雄 様

CDの合唱も当方の家庭礼拝にて感銘深くきかせていただきました。

(団友、政治学者。新著『国家と宗教』岩波書店刊ご惠贈いただきました)

渡邊 明 様

この度の旅行は、全くの個人企画ということでしたそうで、さぞ大変でしたでしょう。それだけに大成功の喜びが文面に満ちみちていました。それ以上に感じられましたことは、ご当地ドイツの人々のいつわりのない好奇心。人々は恐らくこのFernost[極東]からの客達との思わぬ出会いを、いい意味でひとつの「事件」のように感じたのではないかと文面からは窺えました。

それにしても大村先生を始め、皆様の思い切った行動力には敬服いたします。「初めに言葉ありき」に因んでゲーテの語った「初めに行いありき」こそ、歴史というものの確実な一歩なのだということを思い巡らされたものです。

(団友、声楽家)